PROJECT

AMUR

1998

Edited by Hirofumi KATO,
Masahisa YAMADA and I.Ya. SHEVKOMUD

Masters Program in Area Studies
University of Tsukuba

Project "AMUR" Research Group

初期鉄器時代のビーストラヤ第２墓地の発掘調査

V.A.デリューギン[1]

本論においては、1992年に発掘調査を行ったビーストラヤ２遺跡について報告する。本遺跡は、ハバロフスク市から西方１キロのアムール川左岸に位置する鉄道橋脇に所在する。遺跡は、長い砂丘上に位置し、河川現水面からの比高は３メートルをはかる。調査時には、遺跡の大部分が破壊されていた。この遺跡について最初に言及したのは、V.K.アルセーニエフ氏であり、1913年に第１砂丘と第２砂丘において女真文化の遺物を発見している（Медведев В.Е. 1982）。その後1983年に、Yu.M.ワシーリェフ氏によって、アムール川の支流であるビーストラヤ川岸にある第１砂丘で中世のパクローフカ文化のビーストラヤ第１墓地が発掘され、西方に300メートルはなれた第２砂丘においてトレンチ内から初期鉄器時代の土器片が出土している。ビーストラヤ２遺跡で検出された墓地の遺物については、指型押文がある土器片に基づいてポリツェ文化に位置づけられている（Васильев Ю.М. 1983）。

１、遺構

我々の発掘調査では、ビーストラヤ２遺跡に、826㎡の発掘区を設定した。基本土層は、上位から３層に区分することができる。第１層は表土層で約12－25㎝。第２層は灰色砂土層で約20－40㎝。第３層は茶色砂層である。検出された墓は、砂丘の最も高い中央部に集中している。墓壙の中の人骨は、保存状況は良好ではなかった。アムール川流域に位置する中世の埋葬遺跡では、いずれも同様の状態である。たとえば、コルサコフ墓地の147基の墓（38.5%）では、「人骨が全く保存されておらず、非常に少ないので埋葬方法を特定することができない」と報告されている（Медведев В.Е. 1986）。

ビーストラヤ２遺跡には合計で12墓が調査された（図１．２）。

１号墓は長さ180㎝、幅約85㎝の長円形で、深さ約50㎝をはかる。長軸の方向は北西—南東方向である。墓壙壁は底部に向かい次第に狭くなる。埋土は灰色砂質土層で、遺物は副葬されていなかった。墓壙を覆う２層からは、指型押文の土器片２点が発見された。１号墓の北西1mはなれた箇所では碧玉製の玉が二点出土している。

２号墓は長さ225㎝、幅約109㎝の長円形で、深さ約10㎝をはかる。長軸の方向は北東—南西方向である。墓底は西方へ傾斜している。南西部分では炭の細片を含んだ灰色砂がみられた。墓壙中には遺物が副葬されていなかった。墓壙を上面において粘土紐をもつ土器片の集中が認められた。

---

[1] 筑波大学大学院歴史・人類学研究科研究生

3号墓は長さ215㎝、幅約105㎝の不整な長円形で、深さ約40㎝をはかる。長軸の方向は、ほぼ北—南方向を示す。墓壙壁は底部へ向かい次第に狭くなる。墓壙の埋土は炭の細片を含んだ灰色砂質土層で、副葬品はみられなかった。墓壙の底部には東側の壁の際に深さ約17㎝のピットがあった。

4号墓は長さ176㎝センチ、幅約84㎝の長方形で、深さ約40㎝で、長軸の方向は北東—南西方向である。墓壙の壁は底部へ向かい狭くなる。墓壙の埋土は、第2層とも同様の灰色砂質土層である。墓壙底部の北西壁には、無文の小さい土器（図３－６）と剥片が発見された。墓壙上層には、南側の粘土紐をもつ土器片の大きな集中がみられた。

5号墓は長さ182㎝、幅約76㎝の長円形で、深さ約30㎝で、長軸の方向は、ほぼ北—南方向を示す。墓壙の底部は北側に傾斜している。埋土は、灰色砂土層であった。墓壙の底部には南側に直径18㎝、深さ約11㎝の円形のピットがあり、西壁側に無文、赤色の小さい土器が検出された（図３－１０）。

6号墓は長さ188㎝、幅約70㎝の長方形で、深さ約20㎝をはかる。長軸の方向は北—南方向である。壁は垂直であった。墓壙の埋土は灰色砂土層で、副葬品は見られなかった。墓壙外の遺物としては、墓の西側に粘土紐と真珠型押文をもつ二つの大きな土器の集中が発見された（図３－１）。その集中の中には無文の小型土器の破片も含んでいる（図３－１１）。

7号墓は長さ200㎝、幅約82㎝の長円形で、深さ約20㎝をはかる。長軸の方向は北—南東方向である。墓壙壁は底の方へ次第に狭くなる。墓壙の埋土は灰色砂質土層であった。底には北東壁の側に無文の土器が発見された（図３－８）。

8号墓は長さ182㎝、幅約67㎝の隅丸の長方形で、深さ約20㎝をはかる。長軸の方向は北西—南東方向である。墓壙壁は底の方へ次第に狭くなる。墓壙の埋土は灰色砂質土層で、副葬品はみられなかった。墓壙上面の南側には埋葬儀礼に関連すると思われる炉が検出された。炉の中には、3個体分の土器が発見された（図３－３，４，５）。その内の一つは頸部に刻みをもつ粘土紐を張り付けた土器であり、別の土器は無文である。

9号墓は長さ160㎝、幅約80㎝の不整な長円形で、深さ約10㎝で、長軸の方向は西—東方向に近い。墓壙壁は底へ向かい次第に狭くなる。墓壙の埋土は灰色砂質土層で、東側から骨製玉、中央で頸部に縦型の刻みがある３個体の土器片が発見された。

10号墓は長さ180㎝、幅約９０㎝の不整な長円形で、深さ約30㎝をはかる。長軸の方向は北西—南東方向である。北西壁以外は底部へ向かい次第に狭くなる。底は北西壁側へ傾斜している。墓壙の埋土中には、炭の細粒を含んでいる。南西壁側には頸部に刻文をもつ粘土紐を貼り付け、肩部に平行の波形刻文を施文した土器が発見された（図３－７）。

11号墓は長さ168㎝、幅約85㎝の不整な長円形で、深さ約22㎝をはかる。長軸の方向は北東—南西方向である。墓壙の北東壁側は、底の方へ次第に狭くなる。墓壙の埋土は、灰色砂質土層で炭の細粒を含んでいる。副葬品はみられなかった。墓壙上面の西側には、粘土紐をもつ３個体の大型土器の集中が発見された。

12号墓は長さ172㎝、幅約80㎝の長円形で、深さ約25㎝センチをはかる。長軸の方向は西—東方向に近い。墓壙の底は東方へ傾斜している。副葬品は見られなかった。

さらに、発掘区の南側には直径 170 ㎝、深さ約 70 ㎝の円形のピットが検出された。埋土は灰色砂質土層で、底に一点の無文土器片が見られた。発掘区の南東部には、径約 2m、厚さ約 10 ㎝の炭の集中区が発見された。遺物としては、土器片が検出された。土器片は 8 個体分の指厚型押文を施したおのである。発掘区の中央や西側には、ピットがある。このようなピットの位置から、ある場合には、程度約 2x3 メートルの埋葬儀礼にともなう施設の存在を仮定することができる。

2．遺物

この発掘調査で出土した遺物は、土器、石器、骨製と石製の玉である。

出土した土器は、ウリル文化の特徴があり、3 群に分けることができる。得られた土器の中には、パクローフカ文化の土器片やポリツェ文化に特徴的である指厚型押文をもつ土器片は少ない。それらの土器片は墓から離れて点在し、全土器点中において 0.5%しか占めない。よって、墓壙の時期は、ポリツェ文化の指厚型押文をもつ土器の出現期（Деревянко А.П. 1973）、あるいはウリル文化の終末期に属すると考えられよう。

第 1 群の土器は、もっとも量的に多いもので、約 70%を占める。粘土紐と真珠型押文をもち、狭い頸部と狭い底部、突出した胴部が特徴的な大形土器である。1 群の土器は、破砕されて墓の上面にまかれており、埋葬儀礼として供献されたと考えられる。

第 2 群の土器は、高さ約 40 ㎝までの中型の深鉢で、全土器中の約 27%を占める。土器の外面の整形はミガキ、各種の型押文（叩き目）、指型押文が施されるという 3 つの製作技法に分けられる。指型押文をもつ土器片は細かく数も少ない。そのために土器の全面に指型押文があったのか、それともウリル遺跡（Гревенников А.В. 1990）出土例のような、土器の頸部の外面だけにその文様があったのかは不明である。外面に指型押文をもつ土器は頸部と口縁の直下に指型押文をもった厚い粘土紐が付されている。型押文（叩き目）をもつ土器にも類似の粘土紐がある。なお、ミガキによる整形の土器は頸部の粘土紐に縦型の刻み、胴部と口縁の直下に波形刻文が施される。

第 3 群の土器は墓壙内出土の遺物である。小型の土器には、大部分にミガキによる整形が見られる。外面は赤色である。これに粗略化した第 1 群・第 2 群の土器が伴い、副葬品としての土器セットを構成している。2 点の土器は頸部に刻みをもつ粘土紐の跡が認められ、一つの土器はさらに補足的に胴部に波形刻文が施されている。

土器以外では、骨製、石製の遺物が発見された。骨製の遺物は 9 号墓内とその墓から南方に 3 メートル前後に出土した長さ 1.5 ㎝、直径約 0.7 ㎝の円筒状の 2 点の珠がある。石器は堀り返された地層より出土した磨製石斧片があり、石鏃としては 8 号墓から南西に 1m はなれた地点よりに基部が平基で菱形の石鏃が出土している。1 号墓の脇からは、長さ 4.3 ㎝で幅 1.8 ㎝、長さ 3.6 ㎝で直径 1.3 ㎝の円筒状の碧玉製管玉が出土している。2 号墓から北西に 3m 離れたと点からは、長さ 1.5 ㎝、直径 1 ㎝の黒白色水成岩製の管玉が出土している。

3 ロシア極東における初期鉄器時代の墓地

ビーストラヤ第２墓地では、合計で12基の墓が発掘された。埋葬方法については、文化層の不良な保存状態と砂地であるという性格上、また人骨が未検出であるために推定することが困難である。しかし、一部、埋葬方法を推定するが可能である。墓壙は主に長円形で、長軸の平均は186㎝、短軸84.5㎝である。墓壙の深さは、10㎝から50㎝まで見られる。墓壙の平面形と長軸方向との間に有意な関係を見いだし得ない。例えば、西—東方向に長軸を持つ９号墓では、玉の出土を立脚点として頭蓋骨が東方向に向けられたと断定できない。

墓壙の長軸方向については、７号墓を除いて斉一性がみられる。墓壙内の土器や供献と推定される土器片が西側より出土している。墓壙の規格から見て、遺体の埋葬姿勢に規則性があると思われる。４基の墓の埋土には炭の細粒が含まれており、埋葬時には特定の役割りを火が果たしたと考えられる。類例としては、ナナイ族は葬儀の時に故人の持ち物や食物を焼き「故人の火」と呼ぶ儀礼があった（Смоляк А.В.1980）。ウリル文化の墓地に見られる８号墓の側の炉跡の中に出土した食物跡をもつ土器、１０号墓の内から食物跡をもつ土器はこのような儀礼があったとも考えられる。

1967年のリブノエ・オーゼロ集落遺跡の調査では、１号竪穴の近くに１基の墓が発見された（Деревянко, А.П. 1973）。墓の規模は、70x60㎝をはかり、保存の良くない頭骨、脛骨、股骨や石斧、土器片が検出された。二次埋葬の可能性があり、被葬者は１竪穴の住人とみなされる。

沿海州には、ウリル文化と同期のヤンコフスキー文化の墓地が２箇所調査されている。リブノエ・オーゼロ遺跡の場合のように、墓地は集落と同じ地点に位置する。マラヤ・ポドゥシェチカ集落遺跡ではヤンコフスキー文化層の中に16基の墓とばらばらの遺骨の集中が発見された（Андреева З.В., Жушховская И.С, Кононенко Н.А. 1986）。主に墓は墓壙を持たない。ある墓は２０センチ前の堀り込みを持ち、墓縁に砕石積みがあった。この墓地は頭位な南方向であり、主として一次葬であるが、火葬と二次葬もある。たとえば、14号墓は墓縁で炭層が見られる火葬墓である。副葬品は１ないし２本ずつの耳玉で、２基の墓では土器が副葬されていた。

さらに、ヤンコフスキー文化の墓地はチャパーエフ集落遺跡においても調査されている（Андреева З.В., Жушховская И.С, Кононенко Н.А. 1986）。そこでは一次葬として色々な頭位方向を持つ墓があり、二次葬と解釈される遺骨の集中があった。チャパーエフ遺跡では、マラヤ・ポドゥシェチカ遺跡のように、副葬品として頭の飾り物が大多数を占めている。このような副葬品が少ない墓は、十分な葬送儀礼の規正が厳守されず、大急ぎで埋葬が行われたと考えることができるであろう。おそらくは、この種の埋葬は、戦争と疫病の際に行われるのかもしれない。この仮説は、埋葬地が集落に近接し、ほとんど堀り込みを持たないことからも裏付けることができる。一方でヤンコフスキー文化の墓地とビーストラヤ第２墓地は、頭位方向に規則性がなく、一次葬という共通点が二つ見られる。

時期的に後続するポリツェ文化における埋葬は、ハバロフスク市内における遺跡とペトロパーフロフカ第１遺跡で見つかっている。ウィンザウォード遺跡の１号墓とアムール駅遺跡の３号墓では墓の検出状況が良くなかったので、埋葬方法を鑑定することができない。しかし、ビーストラヤ第２墓地のように、ウィンザウォード遺跡の２号墓は遺存状況が良く（Окладников А.П. 1980）、供献と思われる大形の土器片の集中が認められ、一次葬であると推定することができる。コプィチコ氏によって、１世紀とされるペト

ロパーフロフカ第１遺跡における頭位方向は、南—北方向であり、火葬を行ったと指摘される（Колпико B.H.1988）。

ビーストラヤ第２墓地はヤンコフスキー文化のウィンザウォード遺跡の２号墓とともにいくつかの共通点が認められた。しかし、その墓地はアムール下流域・沿海州の初期鉄器時代の墓地とは違って、集落に近接していない。河川浸水区域の砂丘における墓地は中世時代のパクローフカ文化に特徴的である（Медведев B.E. 1986）。ウリル文化やパクローフカ文化と関連性を認められなかったが、これは初期鉄器時代の墓地がほとんど調査されていないことに起因すると考えられる。現在、ハバロフスク市の周辺にはウリル・ポリツェ文化の墓地が４ケ所が発見されている。これからの遺跡の発掘調査の進展と墓制の解明の必要性が求められる。

文献（露文）

アンドレーワ　J.V.,　ズシホフスカヤ　I.S., コノネーンコ　N.A. 1986

『ヤンコフスキー文化』モスクワ

ワシーリェフ　Yu.M.　1983

「１９８３年のハバロフスク州スミドーウィチスキ地区とハバロフスク地区における考古学的調査」

『ロシア科学アカデミー・極東支部の考古学・民族学研究所報告』、No.196,

デレビャンコ　A.P. 1973

『プリアムーリエにおける初期鉄器時代』ノウォシビルスク、

グレベンシコフ　A.V. 1990

「プリアムーリエにおける古代の土器模様の分類例（ウリル島における初期鉄器時代の集落の資料に基づいて）」

『シベリアの古代土器—チイポロジ　ー・テクノロジー・意味論）』ノウォシビルスク

コプィチコ　V.N. 1988

「ベトロパーフロフカ　—　初期鉄器時代の墓地（ポリツェ文化）

『ソ連極東南地域における原始時代の遺跡の新研究』ウラジボストク、

メドウェーデフ　V.E.　1982

『ウスリー島における中世の遺跡』ノウォシビルスク、ｐ１１

メドウェーデフ V.E.　1986

『西暦１千年終末・２千年初頭のプリアムーリェ（女真時代）』ノウォシビルスク

スモリャーク　A.V. 1980

『ナナイ族（シベリア民族の家族の儀式）』モスクワ、

オクラードニコフ　A.P.　1980

「１９３５年夏に行われたアムール下流域におけるアムール総合探検の考古学調査について」

『北方アジア考古学資料』ノウォシビルスク、ｐ１２

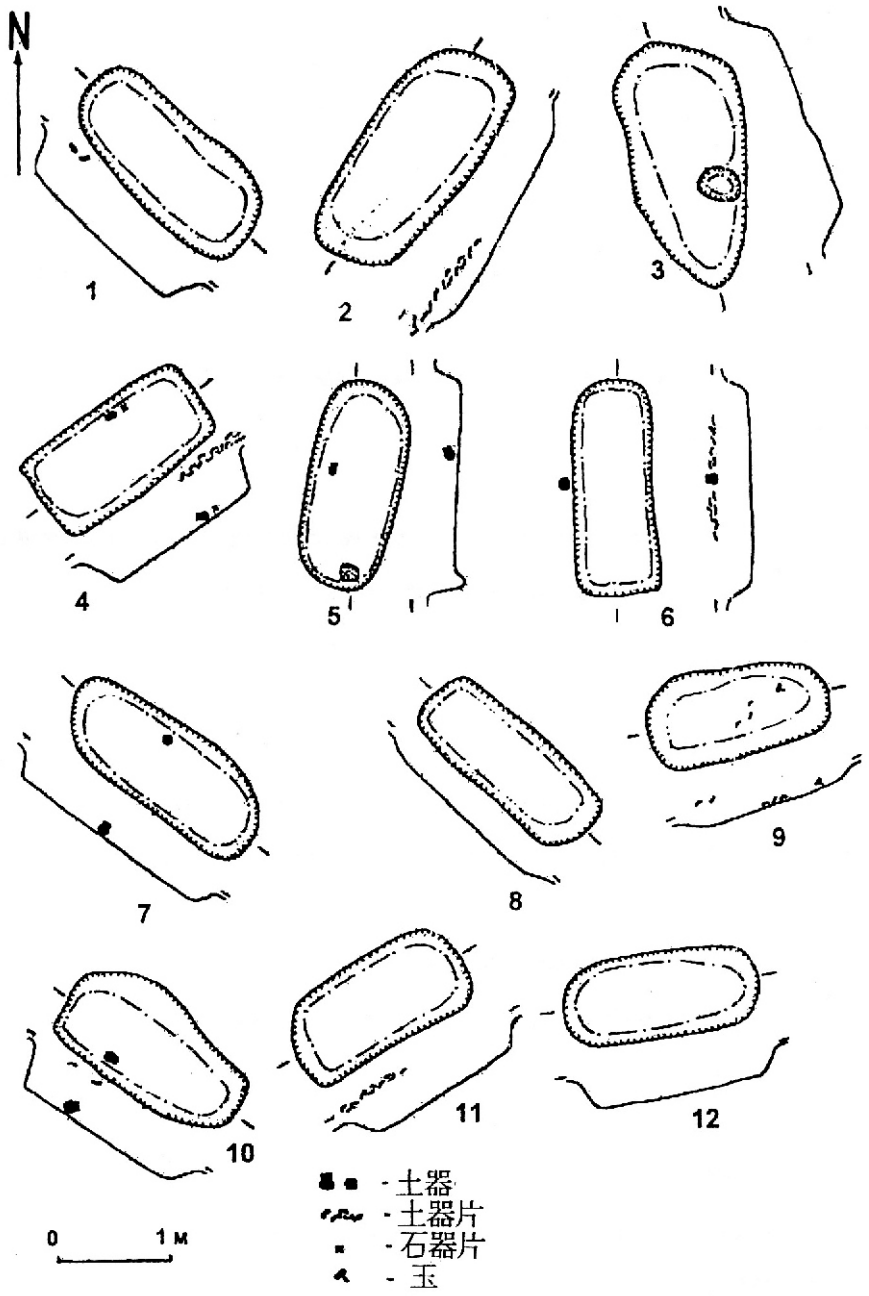

図1　ビーストラヤ第2墓地の土坑墓

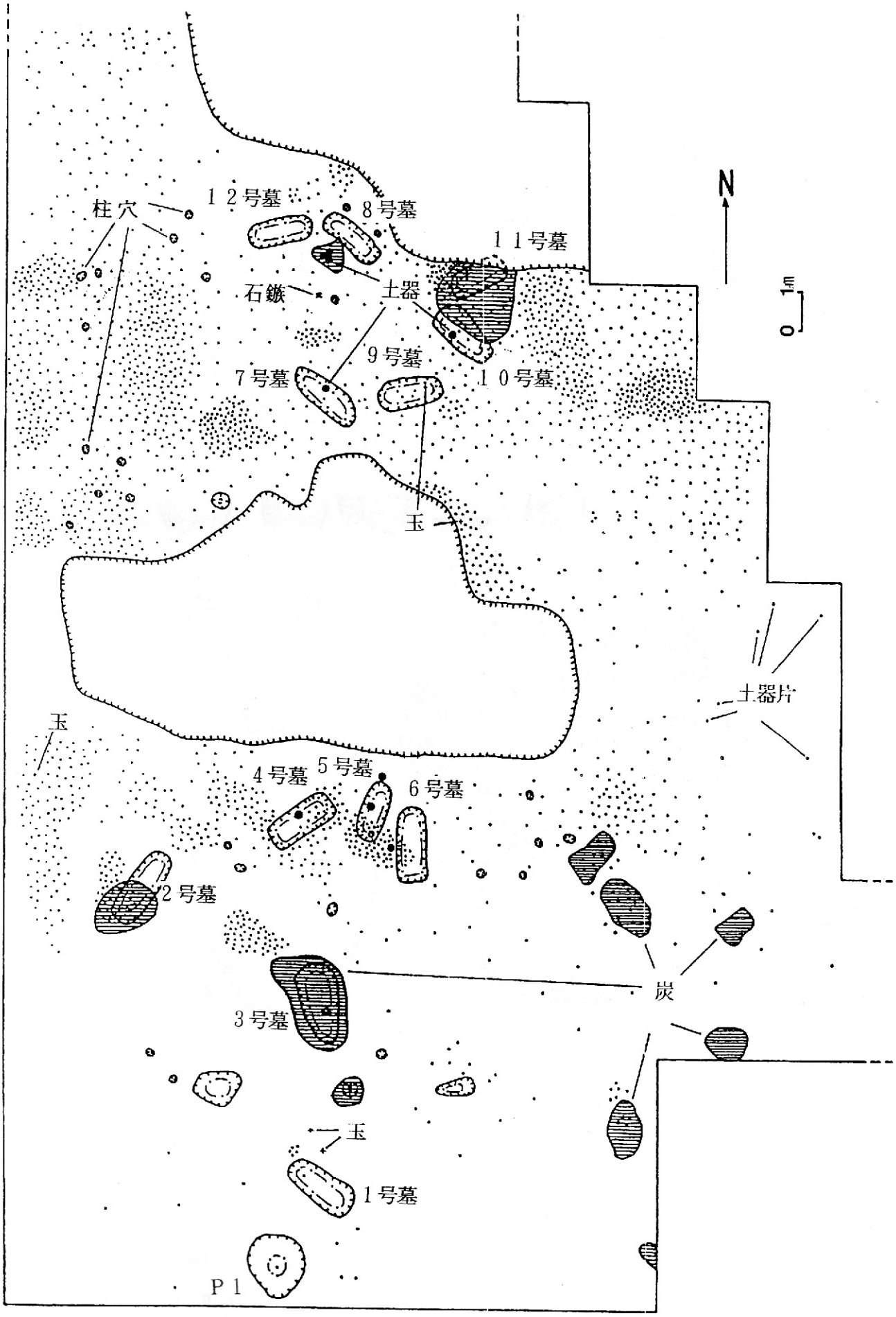

図2　ビーストラヤ第2墓地検出遺構平面分布

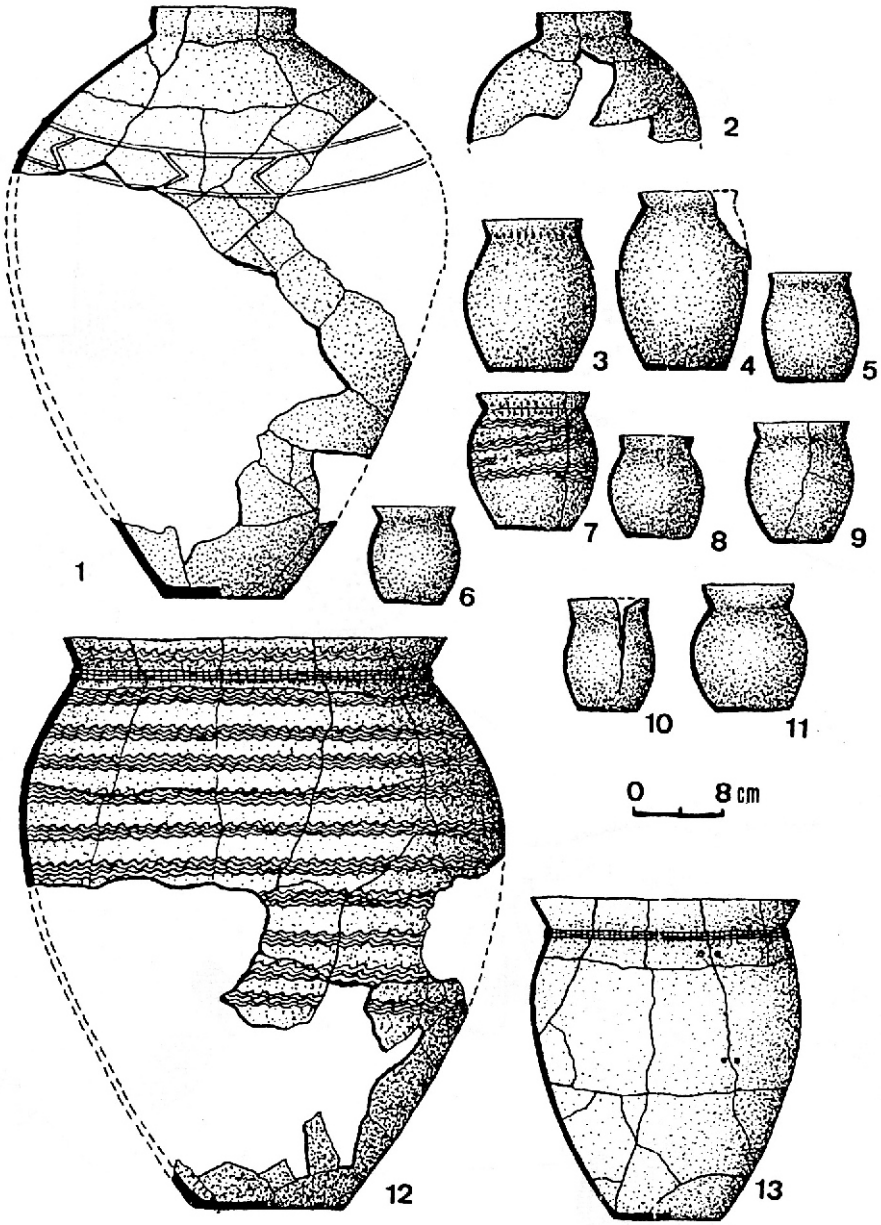

図3　ビーストラヤ第2墓地出土土器